

後宮鈔

2
4596
2

2



後宮鈔

又 2
4596
2

宇多天皇女御

醍醐天皇養皇太夫人

永五味均平藏



皇太夫人藤原温子

父太政大臣基経

諡昭宣公

母贈正一位操子女王

彈正尹人康親女王

紀畧寛平九年七月廿六日己亥從三位藤原朝臣温子

為皇后即日任職官皇后今夜出内裏移御於東五條堀

川院。按諸書書中書或皇居者據當時稱呼非其正位也符宣抄之文可以證延喜七年六月七日。按七日

記園大曆集或某為小日壬子皇太夫人藤原朝臣温子崩

年卅號七條皇后。按畧記云世號東七條天皇之繼母又養

母也有警固事九日令諸道勘申中宮崩後事天皇

着錫符三日。按園大曆云九日中宮御葬也



要記 中宮藤温子 仁和四年十月六日初入内 同九

日為女御 寬平五年正月二十一日叙正三位 按記畧
中右記

位似是三 元正四位下 寬平九年七月二十六日已亥為

皇大夫人年三十六 按古今集目錄
為年廿六是 延喜五年正月出

家 按畧記為昌泰五年誤
又正月集成為五月是 同七年六月薨年四十六 按

十六當作
三十六 昭宣公女 按集成為上女誤園大曆分
按古今集目錄妻為三女是之
按外紀畧後三任
按子明矣

伊勢集 中宮うせせ世路ひささうらうい祈をさ

とて檢非違使の道みあひさきさくんとさきと世

深草よ君サとてりてさあ身乃泪よさある頃とや

不見ぬ大黒山五云音新時大二判集にさ

同集 故中宮うせせ世路つるうら遠江の内侍經お

とせりりささうら 世の中を夢のどくは開

うとらうのあうらに 深草の山あやうら

とら き 松の門とてりさうらひあるき蟬のりら

と名よさうら雲るよきさうら

符宣抄 先中宮 皇大夫人藤原氏
今年六月八日崩 左大臣宣奉勅件宮

互依遺令勿奉入國忌荷前者 延喜七年十二月十三

日大外記阿刀宿祢春正奉

諸陵式後深草陵中宮藤原氏在山城國紀伊郡深

草郷守戸三烟東限禪定寺南限大墓西限極樂

寺北限佐能谷

按記畧云
按外紀畧後三任
按子明矣

宮内大輔益女 仁和四年九月廿二日為更衣 同日
 聽禁色 寬平五年正月廿二日為女御從四位下 同八
 年六月卅日卒 同九年七月十九日贈皇太后宮母
記考十九日語也
 諸陵式小野陵贈皇太后藤原氏在山城國宇治郡小野
 鄉陵戸五烟四至東限百姓口分并觀修院山南限小粟
 栖寺山并道西限榎尾山岑北限松尾山尾并百姓口分

曆十一年六月十六日
 如入善心願
 香外奉
 入

| | | | | | |
|-------------------------|---|------------------------|--|-----------------------|----------------------------|
| 女御從四位上橘 義子 又參議 廣相 | 要記女御從四位上橘義子 寬平五年正月二十六日為 女御 八年正月二十一日叙從四位上參議廣相女 | 女御從四位下菅原朝臣衍子 又右大臣道真 | 要記女御從四位下菅原衍子 寬平八年十二月為女 御右大臣菅道真一女 | 女御從四位下橘 房子 又 未詳 | 要記女御從四位下橘房子 寬平五年十一月十六日薨 |
|-------------------------|---|------------------------|--|-----------------------|----------------------------|

更衣従五位上源朝臣賀子 給六條御息所 又大納言昇

要記依子内親王無品母更衣従五位上源賀子民部卿三昇

一女。按賀子皇胤系圖帝王系譜
勅撰作者部類作貞子

後撰集寛平のみと御く三ねろせ給てのころちり流

帳のめくりに乃人いさつりせ給くちりくもりよせ

らせさるべきは書く流帳の給い付々小八條

御息所 ちりはらきふむもの近きこと誰うあは

る子闡ふす急む

御息所 ちりはらきふむもの近きこと誰うあは

尚侍従二位藤原朝臣履子 給高極御息所又
又贈太政大臣時平

要記雅明親王母後二位履子左大臣時平二女號京極御息所

帝王系譜雅明親王實寛平御子依御出家後為延喜御子母

後二位履子時平公女京極御息所是也

俊秘抄むう京極のふす所と人け時平の大臣のむすあり

延喜帝王の女御は奉り給むとせらるるは母なるもの

のふみすてに其趣ふありて車あてよせり女房あ

とのふかたありて小ものに寛平法乎ゆかりありて御車

のふみすてに其趣ふありて車あてよせり女房あ

のふみすてに其趣ふありて車あてよせり女房あ

後撰集

藤原朝臣某 秘伊勢

又 大和守继蔭

伊勢集いつまの御時少のあやうく 大和守 後和七宗后 ねむりやす好きまらえ

を御つりひにやまといおやある人さうらひきり 懐か

いふ人々のことよもきつう 伊勢時平 宮つゝえまのそとに 字多 時の帝

やつゝをせ給ひきり 伊勢 ようきうらぬ人 伊勢 のことよもきつゝ

を 伊勢 みつゝらりおひおやあも思ひ 伊勢 じつやう

ちにならみ 伊勢 きり 伊勢 を 伊勢 み 伊勢 こ 伊勢 う 伊勢 う 伊勢 み 伊勢 ころ 伊勢

ア 伊勢 我 伊勢 ね 伊勢 や 伊勢 こ 伊勢 う 伊勢 ら 伊勢 も 伊勢 い 伊勢 と 伊勢 う 伊勢 ま 伊勢 と 伊勢 ね 伊勢 ひ 伊勢 き 伊勢 り

卅六人歌仙傳伊勢前大和守從五位上藤原继蔭女 继蔭 元伊

守勢 寬平御時更衣云、雖無一可見皆是兒女子之説

也寬平末年誕生皇子之由見家集七條后宮人云々

王 某

又 參議 十世王

要記 孝子内親王無品 天曆八年九月二十八日薨 號 桂宮

母 仲野親王孫參議 十世王女

藤原朝臣某

又 參議 有實

皇胤系圖 孝子内親王母參議 藤有實女

要記 諡子内親王無品 母藤有實女

○按要記中右記其云年三十九

裏書大皇太后宮 穗子 御事 醍醐天皇后朱雀村上

二帝母儀 昭宣公女 按中右記 延喜元年三月日為女

御 延長元年四月廿六日為中宮 元後三位 承平元年

十一月廿八日為皇太后宮 天慶九年四月廿六日為大

皇太后宮 天曆八年正月四日崩于昭陽舍 年七

天曆御記 西宮記裏 書外引載 云天曆八年正月七日左大臣定奏任御葬

司事 又作諸衛警固三瀨固瀨如例可停止素服

舉哀事 云々今夜奉遷太后於二條院 十日亥

刻坐倚廬 中畧 今夜有太后御葬事 於鳥戶東山邊 奉火葬近習官

女等拾 御骨 十一日早且遣右中將重光於葬所奉

青白... 令年二月

○年代記云葬鳥戶山

云々間從今日以黑衝重供御膳

江家次第 荷前 宇治三所 參議以上一人兼 三所之例太多 宇治 太后 朱雀村上

權記長保三年閏十二月十日丁丑荷前也 中畧 宇治 大皇太后 穗子

大皇太后御事

作四

寬平三年十二月九日為親王 昌泰初為妃 同

二年三月十四日薨 同月二十一日贈一品

又妃為子內親王 先孝天皇女宇多同產 寬平九

年七月三日太子元服受禪其夕新帝納為皇后

○按皇后恐謬大府記云寬治五年十一月七日呂大外記定俊被河內親王入內之時被下女御宣旨之例申云昌泰為子例之文以可證

同二十五日叙三品為妃 同二十一日贈一品 ○按為妃下脫薨

年月

晴申永新金豆也

豨奉姓

女御正三位源朝臣和子

三寶仁和元年四月十四日戊辰皇女和子賜姓源朝臣

預時服月料

紀畧天曆元年七月廿一日甲辰此日女御正三位源和子

薨 或閏七月十一日云々

花鳥餘情延喜御時承香殿女御正三位源和子先孝

天皇の源氏也 ○按齋院記作利子誤

かの女御たのおちいま資頼君よあひまるときつてつり
きり 女宮のみこと 喜よけゆきくのそん年切もせ
もとつりよはれひのきり

和香子 藤原朝臣和香子
平五年十一月卒右大将定國女

女御正五位下藤原朝臣和香子

分脈定國女子和香子醍醐天皇女御正五位下母參議有實

女號大將御息所

要記女御正五位下藤原朝臣和香子 延喜三年十二月補之 承

平五年十一月卒右大将定國女

定國女

更衣正四位下藤原朝臣淑姬

北山抄内宴 延喜三年正月廿二日從五位上源封子無位源

周子藤原淑姬等聽禁色

公補任源兼明延喜才二源氏才十六 母參議藤原菅根

女更衣從四位上淑姬

九曆天曆三年九月廿二日延喜更衣藤原朝臣淑姬卒是

長明親王母也按公補任考天曆二年日卒未知孰是

紀畧天延二年六月廿七日甲辰藤原淑姬贈從四位下按從

疑正四位之誤

紀畧天延二年六月廿七日甲辰藤原淑姬贈從四位下

按從四位下

更衣後四位下源朝臣周子

勅撰作者部類近江更衣源周子右大弁源唱女生持明并

内親王三人

北山抄内宴條延喜三年正月廿二日從五位上源封子無位源

周子藤原淑姬等聽林色周子今日陪膳也

公補任源高明母右大弁源唱朝臣女更衣後四位下周

子○按源氏系圖云裕近江更衣

紀畧承平六年三月七日丙申奉使伊勢大神宮告齋内

親王稚子退出之由是則遭周子喪也

豈奉姓

更衣後五位上藤原朝臣鮮子

紀畧延喜十五年四月卅日庚申更衣後五位上藤原朝臣鮮子

卒伊子外連永女賀茂斎院恭子内親王母也五月四日甲子詔

贈故更衣藤原鮮子家大藏省省布等首書云贈恐賜

全入之の三人

上申四十六歳

更衣藤原朝臣桑子

兼輔之集ののらのみすのねやふまからせ終とねろとて

恨しきほあらなくに子規さつきる

Handwritten notes in the left margin, including '全入之の三人' and '上申四十六歳'.

つまはきふるあつむ

大和物語はみの中納言魚輔のきみ十三幸明のみこの御母桑子御息所内

ふ奉りてさしあに御息所はいふおちりしあはれなむと

いふあはれなむとさきみ幸明のよきとたてて御母桑子

の人の親のふいやはあはれなむとみをうたふまはれぬ

の先帝いと哀ふとさしあに御息所はいふおちりしあはれなむと

いふ

要記章明親王母更衣藤桑子中納言魚輔女

紀畧延喜廿一年五月廿三日女御□□□卒號楓御休息乃

首書云端係二曰空缺当填藤桑子四云桑子中納言魚輔女也○按女御脱名今據其号則中納言魚輔女桑子也然要記以考更衣彼是必有誤

大和物語

更衣従五位上源朝臣封子

北山抄内宴條 延喜三年正月廿二日従五位上源封子魚位

源周子藤原淑姬等藤原聽禁色藤原

皇胤系圖克明親王母更衣源對子大藏卿藤原舊監金女

○按要記以克明母考封子而本書作對子誤也

甘之詞

大和物語
更衣満子女王

帝王系譜修子内親王母更衣満子女王民部大輔相

輔王女○按要記相輔

衣

更衣源朝臣貞子

河海抄醍醐天皇後宮大納言源昇女重明親王母

尊卑分脈 作者部類 以上二考の加入

更衣藤原朝臣某

按中將更衣

皇胤系圖源為明母參議藤伊衡女

分脈藤原伊衡女子延喜更衣高明公母歌人後撰集作者號

中將御息所

○按高明互作爲明
中將互作中將

後撰集了らると出くのち御少みつりりきれい 中將更衣

きつすははちあましものま夢あまもいつうまをうと君のとと

ま 御返 延喜御製 現あそとへうらるる夢と乃之

るるい けりや ちりけりりりり

撰勅作者部類 中將更衣參議伊衡女延喜更衣

源朝臣某

帝王系譜源允明母左兵衛佐源敏相女

○按河海抄左兵衛作右兵衛
衛可疑 皇胤系圖同本書

復次味味集自為貴族

更衣源朝臣清子

要記更衣源清子

續後撰集更衣源清子小治りせ々々 延喜寺制衣

朝雲の何ふ迄多むむくけぬものこころみま

ほき

西公二十月廿十日 音林本大倉内通大藏大納言

更衣氏姓某 稗辨更衣

新古今集弁更衣ひさくくるわらるるにたむとせ

延喜寺の雲井ある鷹のたなき秋

にたむの人の喜つてもせぬ

更衣氏姓某 稗刑部更衣

大和物語先帝の御時刑部のきみとてさうひ治る更衣

夜のさきにまのり出治ひひさくまわら治り

きつりりる 大定子よりさきりのきあせや

よ花山ののけいん

也仍
載此

○按新古今集考亭子院御制衣
然本書稗先帝者皆延喜帝

延喜寺御時

氏姓某 稗按察御息所

拾遺集延喜寺時按察のよやを所久くかんい

師めのとつきまわりせ々々 世中は常あきもの

2
せめ
つらきふはきあきめのこねひつゝ久〜きとよ頼やは

明和三年八月廿一日

大筆青

更衣源朝臣足子

要記更衣源足子

更衣源朝臣暖子

要記更衣源暖子

更衣滋野

幸子

要記更衣滋野幸子

更衣源朝臣柔子

要記更衣源柔子

源之盛

更衣源朝臣俊子

要記更衣源俊子

更衣平朝臣光子

要記更衣平光子

請田林城大宮(同)重光

女藏人二條

續後拾遺集女藏人二條 ねあらぬ我身なうこのをり子を詠も

あはれしにたのむるをりてあはれしに侍るるをり

あはれしにたのむるをりてあはれしに侍るるをり

あはれしにたのむるをりてあはれしに侍るるをり

女藏人内近

故事要畧祖文常語曰先帝御代有龍幸之女字内近藏人容顏美麗

好色之者也奏云白馬之節久不見大場之儀給假將見彼

儀勅聽之出大場見物檢非違使止車之間内近乘車多

出火色源中正為廷尉乞出件衣欲破之處内近招中正小

舍人童贈和歌云大宵女照留日乃色遠林禁波天乃下波誰加

住信 中正雖行有限之法不忍無情之思諸近相臣相識

不破返之其夕歸參大内勅問雜事具奏此事帝曰婦

女衣裳不破有情時聞之者以為美談聖代之事難以緩

法為隆龍幸自有寬恕軟中正亦有譽無謗後中正密通於

内近云

女御正五位下藤原朝臣慶子

ろーまーける母女御も兄こころてうせ給りうけ御つじ
と一ふ心くき物ふやあひ奉り給り

栄花裏書 熙子女王 天曆四年五月五日薨 ○按要記為此日叙後三位
蓋及疾危急持有此恩欤

玉葉集女御熙子女王のくまのく後よるせのあき床

院御製 いとふのふあひの昔乃ねりふえく給あき床

字りあつるのあき床

皇母炎土の疎火熾然と新は一坏の女御朝臣

古昔哉

一金十回也

女御正五位下藤原朝臣慶子

又太政大臣實頼 謚號清慎公

裏書李部王記云天慶四年二月廿二日夕右大將實頼の長女初

叅内裏陪昭陽舍即夜侍寢云々

紀畧天慶四年七月十六日甲戌以大納言右近大将藤原

實頼の女慶子為女御 ○按分脈云大
將御息所

玉葉集朱雀院御時入内の後いりあることりあきん清

慎公のあきつりいり 女御藤原慶子 身のうけ

よおひあきつりいり親さへつりき物ふを有る

要記女御正五位下藤原慶子 天曆四年七月十六日為女

御 天曆五年十月九日卒太政大臣實頼女

即命于辛三月廿三日

勸田縣縣令大筆書



土計實吐請察願意吐以容、野誓而奉願計也
_二結願奉願計計輝采、至示對計八并前計不計
_二二、稱言奉願計計奉命以來八十、辨故言無
_二八并麻翁來願書、對計計對計、計計計計計計
_二位計計計、會計計計計計計計計計計計計計
_二計計計計計計計計計計計計計計計計計計
_二計計計計計計計計計計計計計計計計計計

○按西宮記裏上作
長女

○從三位者從二位半誤也
○此中文字以誤
○曆而記太子攝冠之日又授從

村上天皇皇后

冷泉院天皇母贈皇太后

円融院天皇母贈皇太后

贈木皇太后宮藤原朝臣安子

又右大臣師輔

母贈正位藤原盛子出羽守經邦

紀畧天慶三年四月十九日甲寅三品成明親王於飛香舍娶中

納言左衛門督藤原師輔之女。天曆二年正月廿七日丁丑除

目是日下梨安子壺女御預年給宣旨。天德二年十月廿七日甲

辰策立女御從三位藤原朝臣安子為皇后即日任宮司車

后日右大將師尹讀宣命之間忽然氣上不就列。○按采花

園大曆為七月誤也又本。康保元年四月廿四日己巳中宮皇太后

書。從三位當從二位。廿九日甲戌中宮藤原安子山朋干主殿察

註

○天德三年五月五日
○天德三年五月五日
○天德三年五月五日

○天德三年五月五日

年三十八皇

太子母也 產生之後有此事

○按集成考天德三年五月五日
日畧記考年三十五非也。五

月三日戊寅早且右大臣以下參仗座定行皇后山崩葬官

事警固固關如常今夜奉移皇后於東院東院者

皇后領在東洞院路與待賢門路之宅。中已如教言

同明經道重勳由皇太子為母后服制坊司坐官諸司

近習官後服。七日壬午大雨洪水今日奉葬皇后於

山城國愛宕郡野野方野 或云神樂岡西北。按 鴨川汎溢

不能渡輿往還不通今日亥刻東宮遷御左近衛遣皇

后初七日諷誦 八日癸未去夕皇后葬送依洪水逗

留莊嚴寺今日卯刻奉渡已刻始事未時奉

葬了 安和二年八月廿五日庚子太上天皇尊號

詔大内記伊輔作之又贈贈皇太后藤原安子大皇大

后

西宮記裏書天慶三年四月十九日成明親王在飛香舍納

左衛門督師輔長女未聞人臣在禁中行嫁娶禮頗

可恠也

符宣抄太政官符中勢大藏宮内等者 外 從四位下藤

原朝臣安子 師輔女 右女御如件者宜承知依例行之符

到奉行 右中弁 右相 右女史 天慶九年五月廿七日

裏書贈大皇太后宮 安子 藤原 村上天皇后冷泉岡融二帝母



儀九條右大臣師輔女女贈正一位藤原盛子武藏守經

邦女 天慶三年四月十九日於飛香舍配合年十 同九年

^九四年四月十三日為女御 從四位下年二十一〇按年二十一當作年二十又要記云五月九日叙從四位下

二十七日為女御是也 天曆十年四月二日敘從二位 天德二年十月

廿七日為中宮 〇按要記云三十二歲 康保元年四月廿九日山崩于

主殿齋八年卅 同四年十一月廿九日贈皇太后宮 安和

二年八月廿五日贈大皇太后宮

又村上御記曰應和元年四月廿九日辰刻使藏人文利問中宮

兼令問止產卷長否之由還來申伊尹朝令申云自

今曉刻計氣息雖通不可敢存坐更不可被行他

事即令召推賢參來令文利申云中宮氣已絕但御身

頗暖依有事疑不能上第通朝臣有所令申為之如何云

又遣文利問中宮已刻崩文利還來申云中宮已崩加持僧

退下皇后是前大臣藤原師輔朝臣第一女諱安子母故出羽

守藤原經邦之女盛子也予在瀋之時以天慶三年四月配合

為儲貳之後同八年五月以太弟妃授從五位上及于登帝

位為女御授從七位下厥後頻進階級又授從三位天曆元年五

月生男子以同年七月立為皇太子太子初謁見之日又授從二位

至天德三年策命為皇后以應和四年四月廿四日於主殿應廳

誕生女兒今日已刻終于同盛時年三十八云末刻或人告曰中宮今

間中襖生云又遣文利問消息文利還來申云第通朝臣云近侍

女等以薄紗掩面而如風吹疑此氣息歟又御身體冷軍更以

暖熱仍即加持僧猶令加持又淨藏法藏等下可中襖生給之狀

故所行也中兼問今間消息文利還來申云伊尹朝臣等中御

胸頗暖雖有事疑更非可云

類符言廿一乃
載言符月
日符合

御言承朝臣高明宣奉初宜依例下知一所司者有宜

承知依科行之符到奉行 左少并紀朝卜 左少史并連扶系

康保元年十二月四日

又

大改官符山城國司應充假陵戶伍烟事一右宇治新
陵新一所御如件 國司承知依科 行之但限十箇年
依例相替符到奉行 左少并紀朝卜 左少史并系
康保元年十二月四日

江次符

符前

宇治之所

參議以上一人兼
三所之例太多

中宇治

中后

冷泉
四誌

限土吉

權記長保三年閏十二月十日丁丑竹前也宇治後宇治皇孫
安子

嫌時直

阿部三年十月十八日

藤原

大宮同文七

大宮同大

○按裏書為廿六日未知孰是

天曆元年十月五日卒年十五

同十

三日贈後四位上

續後撰集女御藤原述子かくし侍みまゝらる勅雪女御

覽一々 天曆御製衣 婦らともたゞま清ぬる白

雪も人小よせ一々水 くるるり

續古今集女御みうくもくくのまけにのみく清極公見るから

一袂るぬるさくら花らるるほの雲やおくらし

拾遺集大臣女御うせ侍るをたぢあとののまよつりる

天曆御製衣 へまきらあのをとねらあもあや一々あも

るるあもるる

女御後四位上徽子女王

又 一品式部天曆親王 某 太政大臣志平女

紀畧承平六年九月十二日戊戌卜定伊勢齋宮彈正尹重明

親王女徽子女王卜食八年 天慶元年九月十九日己未齋宮徽

子女王自野宮行禊齋向伊勢天皇不聿八省依御物忌也

八年正月十八日中務方重明親王室家藤原氏卒伊勢齋

宮母也仍齋王退出 八月十三日遣使於伊勢大神宮告齋

王徽子依母喪退出之由 天曆三年四月七日庚辰此日徽子

女王為女御 前齋王又重明親王女

源語秘訣引李部王記云天曆二年十二月卅日徽子女王入内仍

重取案内供餅不可過今夜之故也 ○按要記卷二月不注日裏書三十一人歌化傳為元年共謀

○按裏書為廿六日未知孰是

天曆元年十月五日卒年十五

同十

三日贈從四位上

續後撰集女御藤原述子かくし侍みまゝのり功雪文御

覽一々天曆御製 婦ふともたゞり消ぬる白

雪も人小よせ〜〜〜

此〜〜〜因さ〜古も新墓

女御從四位上徽子女王

又一品式部重明親王某大政大臣志平女

紀畧承平六年九月十二日戊戌卜定伊勢齋宮彈正尹重明

親王女徽子女王卜食八年天慶元年九月十九日己未齋宮徽

子女王自野宮行禊盃向伊勢天皇不聿八省依御物忌也

八年正月十八日中務方重明親王室家藤原氏卒伊勢齋

宮母也仍齋王退出八月十三日遣使於伊勢大神宮告齋

王徽子依母喪退出之由天曆三年四月七日庚辰此日徽子

女王為女御前齋王又重明親王女也首書云女字恐衍

源語秘訣引李部王記云天曆二年十二月卅日徽子女王入内仍

重取案内借餅不可過今夜之故也○按要記為二月不注日裏書三十一人歌化傳為元年共謀

裏書女御徽子女王事村上女御式部口重明親王女母貞信公女 承

平六年九月十二日戌戌卜定齋宮年十二〇按紀畧為年八天慶八

年正月十九日遭母喪 同七月十六日退出 天曆元年入内

同三年四月七日為女御 同五年五月廿三日叙從四位下〇按五

月当作 應和二年正月叙從四位上 寛和元年 月 日

卒年五十一〇按五十一当作五十七 三十六人歌仙傳為五十八亦誤

北山抄門宴條天曆五年依呂參御前奉尚侍從二位女御徽子女王

從四位下加階事呂内記仰可儲位記之由上

三十六人歌仙傳從四位上徽子女王三品式部口重明親王女母

貞信公二女 承平六年九月十二日卜定八歳為齋宮 天慶八

年正月十九日遭母氏喪 同七月十六日退出 天曆元年

入内 五年正月廿三日内宴叙從四位下女 應和二年正

月八日叙從四位上 寛和元年卒年五十 號齋宮女御〇按大

鏡云承香 媛女御

Handwritten cursive text, likely a signature or note.

女御從四位上莊子女王 稔麗景媛女御 父 中務口代明親王

采花月のいふ此中門の清けらるる乃重明の式ア乃此中

むすの女御少れを又なる 中兄才此代明の中務乃

之此中女麗景媛後の女御とさるらいま 中務 麗景

御芳子叙四位之喜

紀畧天德二年十月廿八日以藤原芳子為女御

中納言師尹口女也

三年

二月廿二日丁酉女御藤原芳子叙正五位下

○按九曆作從五位上語北山抄之文以可證

康保四年七月廿九日先皇女御從四位下藤原芳子卒大

納言師尹息女也

更衣源朝臣計子給藤原伊息所

又中納言庶明

分脈源庶明

中納言從三位子庶明

女子村上女御庶幡御息一所拾遺作

者

皇代曆更衣源計子中納言庶明女

○按計子皇年代記作計子玉葉集作詞子共謬也

采花月の廣幡中納言庶明の御女此ろをの御息計子一所と

てれた中畧女あふせれり中畧いろを御息一所

あやう心あはれうろとせあをば見えもねりあつり

々内りうあむ ああもてはゆき乃せきもか

すきうみくといこきあをへさうとらうまねる

やういせさてゆきいせあをせ給ひをけゆ返す

あういちかふりせりいをに廣幡のやす

あはちきものなるるかりせ給ひをたれをころか

ほ心ちとに見ゆせとねりきり

更衣藤原朝臣祐姬

父 大納言元方

采花^{月の}宴 元方民部卿のむすめしるわが御後へり 中書 元方の御

息所へりあらぬまはれり 中書 御後へりあらぬまはれり

見こせしきき 中書 物うらは又ありて 中書 物うらは又ありて

心 中書 乃見こせしき 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

一 中書 乃見こせしき 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

ま 中書 乃見こせしき 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

ま 中書 乃見こせしき 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

裏書三品兵部卿廣平親王村上天皇第一皇子母更衣藤原祐

姫民部卿元方之女 ○按帝王系譜作元子皇什曆祐姫作祐妃 姫妃讀蓋同耳

服部正年壬申六月

新集

紀畧康保四年七月十五日壬寅今日先帝女御從四位上廿壯子女

王并更衣藤原祐姫等為尼大法師千觀為戒師

可勝可勝可勝

覺

更衣正五位下藤原朝臣正妃

父 左大臣在衛

采花^{月の}宴 在衛乃あせら大納言のむすめあせら此御息一乃

さ 中書 乃見こせしき 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

の 中書 乃見こせしき 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

あ 中書 乃見こせしき 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

新勅採集雪のあは侍々る衣按察更衣まつり 天曆御

製 冬の衣乃雪とつと 中書 物うら 中書 物うら 中書 物うら

御返し更衣の妃 為のよき福をあたふにむすこを

つとむるゆきの数ふりまると

紀畧康保四年七月廿九日壬子更衣正五位下藤原の妃卒

○按皇胤系圖云左大臣在衛女

尚侍後二位藤原朝臣登子

紀畧安和二年十月十日甲申以從五位上藤原登子為

尚侍 ○按五位下作四位 天延三年三月廿九日辛丑尚侍後二位

藤原登子薨

裏書負觀殿尚侍登子 初適重明親王守明親王薨後入掖庭有六龍 右大臣所輔女

書儀論書冊計覽賦俱

○按要記皇年傳記共云二女 母贈正一位盛子 安和二年十月十日任尚

侍 同九月叙從四位上 ○按此條錯置互移年十月廿日上要記亦同 天福元

年十一月叙從二位 天延元年正月叙從二位 同三

年三月廿九日薨

精吟日記さあつら天福元六月ふりぬ貞觀殿の御方の成と

且内不美音ハ目録ハハニ卷終等目

更衣藤原脩子

父 中納言朝成

分脈藤原朝成中納言 女子天曆更衣御匣殿別當脩子

要記更衣藤原脩子 ○按皇代曆作脩子皇年代記皇代記同本言

更衣藤原有序

天德歌合引御記云天德四年三月卅日己巳此日有女房歌合
事者去年秋八月殿上侍臣聞詩合時典侍余婦等相語
云男已聞文章女互合和歌及今年二月定左右方人就
中以更衣藤原脩子同有序等為左右頭各令排讀
蓋此為惜風騷之道徒以廢絕也

要記更衣藤原有序

○按皇代曆
作有廊

一 古今入本卷育文外並也一
一 古今入本卷育文外並也一
一 古今入本卷育文外並也一
一 古今入本卷育文外並也一
一 古今入本卷育文外並也一

冷泉院天皇皇后

大皇太后常昌子內親王

父朱雀院天皇
母熙子女王 文獻太子女

紀畧應和三年二月廿八日辛亥於紫宸殿有皇太子元服

叶次天皇太子於同殿有宴會今夜太子納故朱雀院

皇女三品昌子內親王為妃母先坊保明親王之女也

保四年九月四日己丑以三品昌子內親王為皇后故朱雀

院皇女即有官司除目

和記云年十八又按
榮花為三坊同日可疑

和二年八月廿五日庚子贈妣贈皇太后藤原安子大皇大

后昌子為皇太后

○首書云昌子為皇太后在天德元年七月一日下文及
畧記榮花物語花山卷可徵此文恐非是

寬和元年二月廿二日下兩白太后宮被供養建立觀音院有行啓

天延元年七月一日壬子詔以皇后昌子內親王為皇太后

以女御藤原皇子為皇后即任職官 寬和二年七月

五日辛未詔以皇太后宮為大皇太后以母儀女御藤原詮

子為皇太后僧尼施物又大辟以下罪常赦所不免者赦

除即日任官司 長保元年十二月一日庚戌巳時大皇

太后宮昌子內親王崩 年五十五在位三十五年 〇按符宣抄云

天曆四年八月十日為門親王歲壹中右記

云康保四年九月一日為皇后年十八 於權大進橋道貞三條宅崩給

也 五日甲寅依太后崩 諸陣警固近江美濃伊勢等國

關又素服舉哀可停止之由給官符於諸國不置國忌

山陵依遺令也是日也奉葬太后於觀音院其禮不異

凡人依遺令也

要記 大后昌子內親王 寬和二年七月五日為大皇太后年三十

七 〇按要記作三十歲者誤也

一日庚戌入夜丑刻許自宮造送云帝惱極急者仍馳參同女房

至今非可奉憑 〇遺令御筆書一卷奉葬送及觀音院事自

余雜事具注給依件遺令云〇可執行後日問帝崩日假所一行之僧亦

申云朔日子終丑始歿猶以朔日可為〇崩日者太后春秋五十在位卅三年

小右記長保元年十二月一日辛亥拂曉召陰陽博士正邦問御入

棺御湯殿出御等事 依重日 不令進勤文 依御遺令不

避重復日 正邦申云辰刻始假御棺子刻奉御湯同時入

棺同刻奉移觀音院者已刻許自地退出日沒還參執行

改下首

小命

長保元年二月廿二日下兩白太后宮被供養建立觀音院有行啓

雜事子刻奉乘絲毛脚車用余牛脚車副古位十人
宮司侍一所長以下角下屬二人大進雅致朝卜執燎在
脚車前實資余權稱正大丈源宰相僧都勝算及僧侶皆著
藁履候御苦且終著給觀音院先是差檢非違使
二人右尉忠信志伊遠令行造道事依御遺令用凡人礼以五日可
令奏公家中略四日癸丑源相公同車參觀音院以正邦宿祿
令進明日脚葬勅文子細不注黃昏退出中略五日甲寅源相
公同事參脚寺外刻地鎮辰刻始造脚魂殿在脚寺內同
刻裁縫素服脚魂殿門二尺許掘地敷薦布絹等令積
薪為居脚棺以使官等令切近忌林一晚頭自家持來
食物屋僧都勝算兩相公及宮司等今朝差權亮景奇

令觸遺令雜事於大外記言可被停山陵國局奉哀素服葬
色々以頭辨令傳奏事權大進道貞朝及河給信時給事山崩給處
實是道貞朝也也脚存生間依有氣色
所令令奏詞云數年公物在令費事右心侍り回之山崩後
雜事不可費公物仍可用凡人礼之由等也中略成回點奉移
魂殿於脚魂殿前奉社導師光願道寺師權大僧都勝算了居
光願少僧都勝算
脚棺於積薪上其後積滿薪於魂殿內阿彌利末慶祓
及脚前信等讀光明真言加持沙奉灑脚棺上了奉
固魂殿了脚車及牛行障脚一所脚屏風脚几帳鋪設
簾脚手水具等施入寺家為脚念佛諸寺參入如初
夜女房車三兩送本宮余及兩相公宮司等參本宮令
始行脚績經脚念佛等信十亥刻許各令散明日可定
行脚態報事之中各仰了

五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e

五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

五五五〇七五 e 五五五〇七五 e 五五五〇七五 e

此條考之

權託長保二年十二月十七日庚申參内之左大臣召此同日記仍奉之
保元年御記物一卷此次申前日有御事一可令勅申一書仰申御言
藤朝臣了其勅文近曾進上而藤朝臣依故大皇太后御改葬穢
不矣于今未上奏

編年記冷泉院後宮皇太后昌子中親王朱花院第一皇女母保明
太子女西坂本觀音寺本願

藤原懷子
藤原懷子
藤原懷子
藤原懷子

贈皇太后宮藤原朝臣懷子

父大政大臣藤原
母准三宮惠子女王

榮花 月のとけ年号... 安和元年... 山月の...

紀畧康保四年九月四日己丑以藤原懷子為女御

Handwritten notes in cursive script, including names like 藤原朝臣, 藤原懷子, and dates.



御前

藤原懷子



御前

藤原懷子

藤原懷子

女系

御前

冷泉院

花山院天皇

贈皇太后宮藤原朝長懷子

父 太政大臣藤原朝長
母 准三宮惠子女王

榮花

月

の 安和元年

御前

紀畧康保四年九月四日己丑以藤原懷子為女御

大納言伊尹一女

此條考之

權託長保二年十二月十七日庚申冬内之左大臣召此間日記仍奉之
保元年御記抄一卷此次申前日有御事一可冷勘中一喜仰中御言
藤朝臣了其助文迎曾進上而藤朝臣依故大皇太后御改葬穢
不參于今未上奏

編年記冷泉院後宮皇后昌子御親王朱雀院第一皇女母保明
太子女西坂本觀音寺本發

大納言伊尹一
女御
紀畧
長保二年九月四日己丑以藤原懷子為女御

Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of the printed text on the right page. The text is written in dark ink on aged paper.

末以可謹

紀畧長保四年九月四日己丑以藤原懷子為女御

○按皇年代記云
大納言伊尹一女



從三位右後二位
前文之叙從二位可以
說又

天延二年十二月七日庚戌皇太子於清凉殿始朝觀亮藤

原時光奉^後抱皇太子但於本宮公口以上有養祿從三位

藤原懷子叙^後二位皇太子母也 同三年四月三日乙巳前

女御從二位藤原懷子薨^後十年皇太子并齋院母也依齋院

退出東院 ○按皇代曆表云藤原懷子薨年卅一互從
本書考三十要記考二十一卷考也 永觀二年十二月十

七日壬辰詔贈皇妣女御從三位藤原懷子皇太后國忌小

陵從^後舊典 ○按右記十二月三日葬之去月廿八日故女御
尊號懷子可稱

懷子 懷子 御事 冷泉院女御花山院母儀謙

德公女母准三宮惠子女王中教力代明親王女 康

保四年九月四日為女御 同十月十七日叙從四位下

天延二年十二月七日叙從二位 同三年四月三日卒 年卅

永觀二年十二月十七日贈皇太后宮

權記長保三年閏十二月十日丁丑荷前也 今字治 贈皇宮 懷子

一 此皆總抄無
一 此亦總抄無
一 此亦總抄無

冷泉院天皇女御

三條院天皇母儀贈皇太后

贈皇太后宮藤原朝臣超子

父太政大臣兼家新大治鳥院
母贈正一位藤原朝臣超子

采花

月の

九條後乃出之高兼家の中納言ときまのいみ

うつきうつてひめきみにととるねんうつての東宮はちこ
にねんうつてひめきみにととるねんうつての東宮はちこ
やうあつてひめきみにととるねんうつての東宮はちこ
ねんうつてひめきみにととるねんうつての東宮はちこ

皇年代記藤原超子藏人頭後三位兼家女

安和元年十

二月七日考女御父未公の女子考女御初有此例

裏書贈皇太后宮超子御事冷泉院女御三條院母儀東

按皇年代記云未公の女子考女御初有此例

三條入道攝政大政大臣女母贈正一位藤原時姫攝津

守中心朝臣女安和元年十二月七日考女御同廿九

日叙後四位下天元五年正月廿八日卒寛弘八年

十二月廿七日贈皇太后宮

紀畧安和元年十月十四日甲子右大臣著座今日中将

兼家女入内超子按采花以超子入内為
在冷泉院讓位後誤也卯以後中位下藤原

愍子御薨殿同超子考女御寛弘八年十二月廿七

日南宮詔追尊皇妣女御後四位上藤原朝臣超子贈

皇太后西直國志山陵

小右記天元五年正月廿八日辛酉大相府被參入申時召

紀畧寛弘八年十二月廿七日丙寅詔追尊皇妣女清後四位
上按上字出 藤原朝臣超子贈皇太后還國焉山陵
依下字

Handwritten text in a cursive style, likely a transcription of the printed text above. It includes the same characters as the printed text but with some variations in stroke and spacing, characteristic of a handwritten copy.

女御正三位藤原朝臣付心子

父 右大臣師輔
母 贈正二位盛子

大鏡付心子古君は冷泉院の付心子より付心子に付心子ま付心子わ付心子る付心子

按皇事代記
本皇在河原

紀畧安和元年十二月七日乙卯以後四位下藤原付心子御篋

殿同超子為女御 天元五年九月廿日戊寅召名除目次

有女叙位從三位藤原付心子 元正四位
下高侍也

要記尚侍正三位藤原付心子。永祿元年九月、日出家

師輔付心子女。天元五年七月任尚侍 同十月叙從三位

按本鏡書云母藤原正三位盛子
又皇年什記云皇右同胞

皇女御正三位藤原朝臣付心子
 大鏡古^{息子}は冷泉院の^{息子}より^{息子}にまわらせ給ふ
 按^{皇女御}里^{正三位}事^{藤原朝臣}代^{付心子}光
 本^{皇女御}皇^{正三位}后^{藤原朝臣}同^{付心子}胞

開成六年八月三十日并命

奈身總下大味園宮上藤原朝臣小題林風卦

奈身總下田縣宮

當西三命正位
高宮卦

按^{皇女御}里^{正三位}事^{藤原朝臣}代^{付心子}光
本^{皇女御}皇^{正三位}后^{藤原朝臣}同^{付心子}胞

女御正三位藤原朝臣付心子

父 右大臣師輔
母 贈正二位盛子

大鏡古^{息子}は冷泉院の^{息子}より^{息子}にまわらせ給ふ

按^{皇女御}里^{正三位}事^{藤原朝臣}代^{付心子}光
本^{皇女御}皇^{正三位}后^{藤原朝臣}同^{付心子}胞

紀畧安和元年十二月七日乙卯以後四位下藤原朝臣付心子御篋

殿同起子為女御 天元五年九月廿日戊寅召名除目次

有女叙位從三位藤原朝臣付心子
元正四位下尚侍也

要記尚侍正三位藤原朝臣付心子。永祿元年九月、日出家

師輔古女。天元五年七月任尚侍 同十月叙從三位

按^{皇女御}里^{正三位}事^{藤原朝臣}代^{付心子}光
本^{皇女御}皇^{正三位}后^{藤原朝臣}同^{付心子}胞

開成六年八月二十日拜命

奈良貞親下大吟園

天和十三寅年六月廿

奈良貞親下日麻官

越田萬載

妹尊下殿十四日麻

苗如麻坊師官

圓融院天皇皇后

皇后宮藤原朝長皇子

父 准三宮兼通 跡忠義公

紀畧天延元年二月廿九日甲寅某日丙大良女藤原皇子入内

○按此條在廿九日麻

七月一日壬子詔以皇孫昌子内親再

皇太后以女御皇子為皇后即任職官

○按本十卷和十一年八月廿九日

天元二年六月三日庚戌寅刻皇后藤原皇子山崩干堀河院

三○按要記皇年代記

五日壬子被定皇后山崩後難事

三箇日間不可有結改彼宮大進橋良平參陣外付大外記弼邦

可止素服舉哀之由奏遺令固關事被付國司又自今日至

此傳(近)正神仕
朝先傳云四三四年
部下有明親王女能
子女王可說

于皇后御葬送日不可音奏之由被仰内豎次召六衛府左右
馬寮兵庫寮仰可有警固之由 七日甲寅左大臣仰外記云
皇后御葬送依例可供奉之由可仰諸司諸衛者 八日乙卯
被遣七箇寺諷誦使使内豎也今日葬送前皇后而大雨之
間東河汎溢害刻渡河 十三日庚申解陣開闢

裏書中宮嬪子忠義公女母式部元平親王女或云兵部有

明親王女云云 ○按要記皇年代記無本
母兵部下有明親王女。 天延元年二月廿九日入

内 同四月七日為女御 同七月一日為皇后號中宮年

廿七 天元二年六月三日崩于堀川院年卅三 同八日葬

送

棠花 月の宴
の巻

うゝゝり程小天福二年にあつたり御門中十三年あらせ

たつとも御元服のことありたり 此奉後の清次郎也
まの攝政の申すことあり

宮門ハ堀川

二年 此奉の御元服在當年入内
此月而本言保以天福

Handwritten notes in a box, including the name 'Utsunomiya' and other illegible characters.

此傳正神位
朝光信云云
部々布明親王女能
子女王可以說

馬寮吾庫寮仰可有警固之由 七日甲寅左大臣仰外記云

皇后御葬送依例可供奉之由可仰諸司諸衛者 八日乙卯

被遣七箇寺諷誦使使内豎也今日葬送前皇后而大雨之

間東河汎溢害刻渡河 十三日庚申解陣開闢

裏書中宮皇子忠義公女母式部元平親王女或云兵部有

明親王女云云 按要記皇年代記 天延元年二月廿九日入

内 同四月七日為女御 同七月一日為皇后號中宮年

廿七 天延二年六月三日崩于堀川院年卅三 同八日葬

送

采花 月の宴
の巻

いづれ程小天祿二年にありしなり 御門中宮年十二ありせ

後より御元服のことありしなり 兼通と云ふ所の宮内

つとまらぬ其御ひめを多しせしめて御門中宮年 宮内マハ堀川か

るいふなり かつくわさうすませ給ひしなり 中書 按御元服在前年入内在 此月而本言母以天祿

二年 又 事非 御元服の事 天延元年とらぬ女御いつしきき記

あつとわらひしなり 我の年の七月一日按改徽の女御きき記ふか

てせ給ひぬ中宮と云ふことえしなり 按撰改当 加ふる御小天延二年にらわ

ぬ林つらひしなり 御元服の事 中宮月々ありしなり ちやちや

やうしきめをさしきりしなり 又おちやけりしなり

乃ちれりしなり 六月二日 御方けせ給ぬあへ

あつとわらひしなり 御元服の事 御元服の事

うひしなり 世の人まいのちやとからぬものなり 東三子後の在

さいとひの事なり 御元服の事 御元服の事

の、かくてすかひしなり 御元服の事 御元服の事

御元服の事 御元服の事 御元服の事

ありしなり 御元服の事 御元服の事

大鏡以後の御むすの或部々有明親王の御母のちら乃以の君円融院
 の御母乃女御小まのり終々天延元年七月十一日○按考五月誤后小まのり終て
 堀川の申宮とりきみこせ終て凡なるゆき天延二年六月二
 日うせ終ゆき

奈有辨貴皇の女御藤原朝臣導子
 永井之藤

御積成軒所言

圓融院天皇皇后宮 一條院天皇代皇太后 三條院天皇代皇太后

大皇太后宮藤原朝臣導子
 父 大政大臣顯 詔号廣義公
 母 正三位嚴子女王 代明親王女

紀畧天元元年四月十日甲子左大臣二女導子入掖庭准女御被免

拜車 ○按榮花考 五月廿二日丙午宣旨以藤原導子為女御 ○按

記不註日皇年代記考 四年蓋入内親也 五年三月十一日癸卯以女御後四位上藤原導子

子立為皇后天皇出御南殿左大臣以下參了宣制之後於
 殿上有任官司之除目次諸衛仰啓陣次大臣以下參賀。

按畧記皇年代記 正曆元年十月五日下末改中宮為皇后以女御
考五日非也

從四位下藤原定子冊中宮即任官司 長德三年三月十

有日一不

皇太子為二女被免
 皇化物格大鏡考一
 作皇代為一女被免
 並

本字云皇太子
 中宮未詳又

○按本古初為皇
太后未

九日癸未皇后宮導子出家

○按要記集成皇
年代記為四年

長和元年二

月十四日壬子宣命尊皇太后為大皇太后。寬仁元年六

月一日戊辰大皇太后宮藤原朝臣導子崩年六十一。五日壬申

奏前太后遺令停止素服奉哀官符給五畿七道諸國又自

今日廢朝五箇今夜彼宮御葬送於般若寺良地

裏書大皇太后宮導子融院后庸義公一女母正三位嚴子女

王中務方代明親王女○按要記伊右記
代明親王三女天祿元年四月十

日入内。同五月廿二日為女御。同五年三月十一日為中宮

○按中右記云立從四位上藤原導子
為中宮年廿六正曆元年十月五日為皇太后宮

長德三年三月十九日出家○按要記云
不停后位長保二年二月廿五日

為皇太后宮○按畧記云世
謂之四條宮長和元年二月十四日為大皇太后宮

○按要記
年五十六寬仁元年六月一日山崩年六十一。同五日葬禮○按
編

年殘篇云六日殯般若寺東北地車
○按葬送以五日夜故葬事係六日歟

御堂開白記寬仁元年六月一日戊辰今朝大皇太后宮崩。五日壬申

大皇太后宮渡般若寺給者用車之。六日癸酉大皇太后宮作此

屋奉置之。渡高倉宿是一條明日立舍依有方忌從中宮与女方

渡院

彼山專不惡也藤氏後多昌帝王國母于今不絕抑有御遺

命有何事乎無指事不可被北月前跡哉抑可在高慮欽

廿一日壬子今日故大皇太后御改葬左將軍云大幼言任公拂曉

○按本方不載
太后未

九日癸未皇后宮導子出家

○按要記集成皇
年代記為四年

長和元年二

月十四日壬子宣命尊皇太后為大皇太后。寬仁元年六

月一日戊辰大皇太后宮藤原朝臣導子崩年六 五日壬申

奏前太后遺令停止素服奉哀官符給五畿七道諸國又自

今日廢朝五箇今夜彼宮御葬送於般若寺良地

裏書大皇太后宮導子四融院后庸義公一女母正三位嚴子女

王中務方代明親王女○按要記伊右記
代明親王三女天祿元年四月十

日入内 同五月廿二日為女御 同五年三月十一日為中宮

○按中右記云立從四位上藤原子
為中宮年廿六正曆元年十月五日為皇太后宮

長德三年三月十九日出家○按要記云
不停后位長保二年二月廿五日

為皇太后宮○按要記云世
謂之四條宮長和元年二月十四日為大皇太后宮

○按要記云
年五十六寬仁元年六月一日山崩年六十一 同五日葬禮○按
編

年殘篇云六日殯般若寺東北地車
○按葬送以五日夜故未葬係六日歿

小右記寬仁二年六月十六日丁未大納言書云一日源大納言書云

故宮子孫不御坐仁和寺親王御骨為紛失了其何可為善

不可必奉移木幡者此事如何者答對云仁和寺例非一

門事先祖占木幡山為藤原墓所仍奉置一門骨於

彼山專不惡也藤氏後裔昌帝王國母于今不絕抑有御遺

余有何事乎無指事不可被北月前跡哉抑可在高慮歛

廿一日壬子今日故大皇太后御改葬左將軍云大納言任公拂曉

指其了 廿二日癸丑故宮却改葬事向建大納言御返

Handwritten notes in a rectangular box, likely a transcription of the text on the right page. The text is written in a cursive style and includes various characters and symbols.

Handwritten text on the left side of the right page, possibly a page number or a reference mark.

圓融院天皇女御

一條院天皇_母皇太后

又太政大臣藤原家 謚號法皇院

母贈正位藤原時姬 攝津守仲之朝臣女

東三條院詮子

紀畧天元元年八月十七日己巳大納言藤原善家卿息女初入掖庭候

梅壺 名詮子○梅台記初 十一日四日乙酉以藤原詮子為女御

寬和二年七月五日辛未詔以皇太后宮為大皇太后母儀女御藤原詮子為皇太后即日任宮司 正曆二年九月十六日壬子天皇

皇行車職曹司依皇太后宮御惱也戊刻皇太后宮落飾為
尾公家被進給百匹麻布千段請僧料也停皇太后宮職
為東三條院年官年爵封戶如元停進屬為判官代主典

按要記名夏元三年即推平改元為長元又

代。按要記考。長保三年閏十二月廿二日東三條院崩于行成

卿第十年四諸參入右大臣以外記令進崩後雜事勘文。按

權記十八日還御文則本言畧記考崩于
行成第榮花遷平惟仲家崩者可疑廿三日庚寅右大臣以下參入

被定明日東三條院御葬送間諸國呂物 廿四日辛卯凶

會日云、可尋右大臣參入被定御葬送雜事。又令奏遺令

又素服舉哀可令停止者子刻天皇令著錫紵給又被仰誓固

事今夜奉葬鳥部野遺令不置國忌山陵止素服舉哀等

天下諒濶

裏書東三條院 詮子 御事。圓融院女御一條院母儀東三條入道撰

政太政大臣女母贈正一位藤原時姬 攝津守中正朝臣女 天

元元年八月十七日入内 同十一月四日為女御。按要記云女御
年中位下 寬

和二年三月廿六日叙正三位。同七月九日為皇太后宮 年廿六

按畧記作三
十六者誤 正曆二年九月十六日出家 年卅 同日院號 年官年

如 長保三年閏十二月廿二日崩 年四十

事可以說由集成三年為三年
皇年代記廿二月廿一日者俱誤也 同廿四日葬鳥部野

小傳東三條院藤詮子因融后一條母東三條瀨白兼家才二女。按

院記云
和二誕生 母攝津守藤仲山陰
七男也女 貞元二十一年四月四日為女御 按貞元之
作貞元之

寬和二十七為皇太后 正曆二十九為后 年卅一今年二月十

日院號。按日本運上錄云
宮院號始此 年官年壽封戶如太上天皇 或九一丁西院
號同五日入道云

長保二。按二當
作三 閏十二月廿二御事 年四十 按本院記云長保五年四月廿
筆御賀閏十二月廿二御事

按院記云皇太后
初觀自野右記
云皇太后初觀元
年正月十四日
元三年正月十日叙後四位下
年正月十四日



采花鳥部野の鳥部野かゝる福ふ女院のせせたまひくちねまゝ愛一の

しり中ととろあといせせほしほさりとあといみのしり中見

しり中福ふしりせせほしり中二三日あつてしり中あつてしり中あつてしり中

いぬ中長保三年閏二月廿二日の事なり中あつて二日ちりあつて

とつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

一二月廿二日 癸卯二月廿二日

いひぬ内あもあつてすくせほ天下らあんあありぬ
わらあつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中あつてしり中

暁更参入中
器出

楮託廿二日己丑休息之間未到許孝我執に馳來告甚重御坐之由即

長保三年閏二月

矣入左府白地出給之間春宮大夫左衛門督宰相中将被假御體

甚重中使往及宮刻許左大臣殿被参西刻山朋給思歎無極御

筭并四十 廿三日唐室右本 暁更参入自内被假奉院縮百

匹用使、縮二百匹布十端米二百石云々御茶室可然事門有

甚定明り難凶會不可忘御葬事云々晴明光宗奉計爾

呂藏人所被勅申雜事云々 廿五日壬辰辰刻兵部大輔兼

隆懸御骨於頭白宇治山僧山明家相後左大臣以下院司女房等相共歸本宮

御三十一日 癸卯二月廿二日

養之故、貴用、以、更、日、繼、續、斷、出、受、意、之、
 臨、美、一、奉、子、新、於、之、自、今、二、十、八、日、中、繼、
 二、十、八、日、之、終、之、白、幕、終、以、來、之、啓、意、之、事、不、
 一、日、一、日、十、五、日、之、國、之、可、然、美、之、繼、續、之、事、
 之、無、之、實、以、繼、與、之、美、一、奉、子、新、且、前、二、日、之、
 八、日、三、日、之、美、也、之、其、出、半、終、其、終、之、終、
 當、出、平、常、中、繼、之、美、一、每、日、一、日、十、五、日、之、
 美、一、日、同、書、
 每、日、二、十、八、日、中、繼、之、美、一、日、繼、之、與、之、

圓融院天皇皇妃

皇妃尊子内親王

又 冷泉院天皇
母 贈皇太后藤原懷子

紀畧天元三年十月廿日前裔院尊子内親王始矣多候丑鹿景敷

冷泉院女也 四年四月十日己酉前裔院尊子内親王叙二品

寬和元年五月一日乙巳前裔院二品尊子内親王薨年廿冷泉

院上皇第二女上皇妃也

裔院記尊子内親王冷泉院才二皇女也母贈皇太后藤原懷

子藤原伊尹公之女也 安和元年七月朔日卜定 天延三年

四月三日懷子薨依是尊子退出本院 天元三年十月廿日尊

子始參假丑鹿景敷 〇按文粹之春秋 四年四月十日叙二品 寬

十有立初内

栄花 花山紀のり 朝光の大将のひめをまわらせ給へとまゝにのれ
如言のま
 へそはせいりせよとねりやまゝはまゝいぢうありまを
 うやのまひもとねりもまわらせなさん乃こころいよら
 の又このひめをまわらせ給へとねりなちてま
 かわせよまのりこの大将のひめをまわらせ給へとま
 へのてねりねりあまき 中 けりとおろのまひやと
 多らせをまわらせ給へとねりまわらせまわら
 ぬ

一対。世同書

毎月二十八日麻遊下観日遊下興大

女御無位藤原朝臣諱子

父 太政大臣 頼忠
母 其 中務代明親三女

紀略永觀二年十二月廿五日庚子太政大臣女藤原諱子入内以承

香殿考休所 按要記日湖外右

小右記永觀二年十二月十五日庚寅早朝参殿亥時姫君入内 全

轉 十月六辛卯右馬从奉承香殿内事内返り云々 廿

五日庚子侍少今日被下女侍二人宣旨承香殿内事等也

要記女御無位藤原太政大臣頼忠四女中務代明親王三

按記略卷五十五日永觀小右記十五日互從
按紀略卷五以承香殿考休所

女 永觀二年十二月廿五日入内。同廿五日為女御

五 左記長元八年六月廿一日癸酉天晴傳聞四條宮女侍

卒云々

以下二点 令版 至諾 亦可たり

平某 給申 致力 後又 給御 匣殿

平某 父若狭守 祐之

栄花 見たてぬ 夢の巻

花山院 東の院 乃九 伊尹公改 御方 にあうらやゆに ねも

しまゝのほかに やゝの御ののむ 平社之女 申務と

ひく明くは 御覧せし 申にあふも ねり 御覧せし

いふあは 御あは いくあは ねり 御足あは

いせきを ねい ねい ねい ねい ねい ねい

いせき 寺へも へらせ ねり ねり ねり ねり

くせ ねり 初花の巻 ねり ねり ねり ねり ねり ねり

郊の命婦 ねり ねり ねり ねり ねり ねり

ねり ねり ねり ねり ねり ねり

奉りし

備王の年 齢身入 奉りし 志合 部 藤 自 然 醒 射 突

平平子

又 若狭守 祐忠 若狭守 祐之女

栄花 見たてぬ 夢の巻 ねり ねり ねり ねり ねり ねり

いせき ねり ねり ねり ねり ねり ねり

於前但馬守平昌生朝臣宅有御座事皇女媛子 十六日已

未皇后崩給 年廿五在位 ○按集成考十五日崩者據 深花十五日夜崩故也 廿一日甲子諸口

定申皇后崩後雜事停止素服舉哀葬官等事諸衛敬言國

固三闕 廿七日庚午今日奉葬皇后宮三箇日廢朝

要記皇后宮藤定子潮白道隆一女母之別尚侍高階貴子從二位成

忠女也 正曆元年二月十一日為女御年十四叙從四位下 十月

五日為中宮 長德二年四月二十四日有事退出後日入内生

生皇子 長保二年二月改中宮職為皇后職 同年十二月十

六日崩二十五歲

權記長保二年十二月十六日己未皇后宮御座、已非常也皇

后諱 子定 前潮白正二位藤子朝長女母高階氏 正曆元

年春入內為女御 冬立為皇后年十四 長德二年有事出

家其後還俗所生皇子都慮三箇敦康脩子又新生女皇子 媛子

也立十一年崩年廿四 ○按紀畧記要記裏書法 廿三日丙寅

此夜奉葬前皇后宮於古波羅密寺 ○按奉葬疑 奉移之誤

裏書皇后宮 定子御事一條院后一品式部口敦康親王母儀

中潮白一女母從二位 貴子 從二位高階成忠口女 正曆元年正月

廿五日入內 同二月十一日為女御 年十四後 ○按大鏡考年十五深花 四位下 作年十六共可疑

同十月五日為中宮 ○按尊記云考 皇宮宮誤 長保二年二月廿五日為皇

后宮 同十二月十六日崩 年二十九 同廿七日葬送

采花の巻 加ふるふ十二月ふらぬ定のちちちや

ま〜〜〜きふやくとまらちちち〜〜〜

い〜〜〜ませ〜〜〜しつとふとあまはいの

に〜とちやまけふこの夜をら見るとま〜〜せは

い〜〜〜きふち〜〜中おとのけうと〜〜

らま〜〜長保二年十二月十五日のよ〜〜ぬ

同いせき〜〜てきせは〜〜とちしつ使ま

ア〜〜中かふる道よしつ中ま〜〜女ふお〜〜中わゆ

らま〜〜す〜〜き〜〜あ〜〜

れ人あ〜〜か〜〜は〜〜あ〜〜

成ゆまはねいと〜〜ちつ〜〜おと〜〜ちか〜〜

こと〜〜 申後ちつをを〜〜てま〜〜むきふら〜〜

き〜〜あ〜〜て〜〜ひ〜〜ち〜〜てま〜〜入を

や〜〜ひえ〜〜せは〜〜中定子やはは〜〜いませ〜〜

て中おのひい〜〜の〜〜を其のちす〜〜や〜〜か〜〜

つ中き〜〜ち〜〜も〜〜も〜〜草とのあ

い〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜〜

後へりけしつと乃や〜〜は〜〜の〜〜あ〜〜

てと〜〜け〜〜け〜〜しつと申後いそ〜〜せは〜〜

南乃〜〜ふ二丁を〜〜なまやと〜〜おびつ〜〜

てついついちる〜〜ふたり〜〜せ〜〜

ね中その夜ふ成ゆまは〜〜つ〜〜い〜〜乃〜〜

ふりたりたませ給し後よりあたまきとあたまに
つらつらせ給しあたまきとあたまに
たりたまへきやとあたまきとあたまに
つきつらせ給しあたまきとあたまに
もせたまへきやとあたまきとあたまに
あたまきとあたまに
あたまきとあたまに

後拾遺集長保二年十二月小皇后宮うせと給ひくさうそ

うせと給ひくさうそ 一條院御製
野廻まゝにむすむすもむすむすは知らずやあらけん

んねをかりりやうりき

紀畧長保元年十一月一日庚辰是日也左大臣第一息女從三位藤原

彰子入掖庭^{二年十月}六日乙酉今日以後三位彰子為女御^{按小}

五年己酉以女御從三位藤原朝臣彰子為皇后^{號之中宮}即日任中宮

長和元年二月十四日壬子宣命尊皇太后為大皇太后

寛仁二年正月七日辛丑節會諸公上表賀

天皇首服以皇太后為大皇太后

万壽三年正月十九日丁酉

又十五日後
○按書後小傳位元
以二為定弘九
疑誤

○按書後小傳位元
三位同十
十二誤也

二東二... 二東二... 二東二...

ふりたりまをせ給帥後よりめきよきものちり
つうまのうせ給うらるるも雪いりしは
たりまへきやもいりうらるるたりま
つきらうをせ給うらるるのちきけり
もせせ給うらるる内車はにわらうを
けりたりまのちきけり
やうらるるのちきけり
けりし中めらるるをせ給うらるる
福のち有様うらるるのちきけり
きよきにせんとなきけり
るるのちきけり
んけりたりまのちきけり

紀畧長保元年十一月一日庚辰是日也左大臣第一息女從三位藤原
彰子入掖庭_{二年十月六日乙酉今日以從三位彰子為女御}
二年二月十日戊午女御彰子蒙可立后之宣旨_廿
五日己酉以女御從三位藤原朝臣彰子為皇后
中宮為皇太后_{寛仁二年正月七日辛丑節會諸公上表賀}
天皇首服以皇太后為大皇太后_{万壽三年正月十九日丁酉}

○按安記云長保元年十一月十日叙從三位女御十月廿二日
○按安記云長保元年十一月十日叙從三位女御十月廿二日
○按安記云長保元年十一月十日叙從三位女御十月廿二日
○按安記云長保元年十一月十日叙從三位女御十月廿二日
○按安記云長保元年十一月十日叙從三位女御十月廿二日
○按安記云長保元年十一月十日叙從三位女御十月廿二日

大臣令申之上可然始以元子
叙三位不思慮之所致也事之末以可證

寬弘二年正月十日叙從二位

同十三日叙正二位

○按從二位正二位之叙位混一度為兩度矣法成寺撰改記云寬弘
二年正月十日叙正二位事與女叙位日私徽叙賜

正三位承香殿又賜同階互待哉只有殿慮他人倚奏哉後蒙中將許消息持來披見
賜而女御從二位者右府中賀退出多々今思賜各正三位互欽之文尚可考

万壽三年十二月十八日為尼年五十三 天喜元年閏七月日薨

今の大凡々令女由又たつてり味もつる難たつてり
心了更勝如きるし明令女由又つてりたつてり世に
新引賊下條餘並難斷度量天つてり具もつる難
榮也つる難つてり具もつる難時味難六羊四目
つ華つてり大凡々つてり心前の大凡々つてり

紀畧長保二年十一月十四日庚辰右大臣顯光女元子初參内承香殿

仰手車母氏天曆盛子内親王同車被參仍仰之 十二月

二日戊戌以藤原元子為女御 右大臣顯光一女
母盛子内親王

權記長保二年八月廿日甲子中勅云女御元子叙從三位事仰左

大臣
右大臣息女切々有被申也本位正五位下
超越不次非常又非常之事也

裏書承香殿女御元子事一條院女御左大臣顯光公女

長德二年十月十四日入内 同十二月二日為女御 長保二

年八月廿日叙從三位 寬弘二年正月十三日叙從二位

田令集稱曰田身三十番實十二番為朝暗朝蘇
又為實（抄）大天（今）曲（天）天（天）
信々河味陳六年二月十日蘇曰其真此心六

紀畧長德四年二月十一日庚辰今夕故瀨白道魚女尊子入掖子。按

一日皇年代
記為十二日長保二年八月廿日甲子以從五位上藤原尊子為女

御贈太政大臣道魚公之一女也 治安二年十二月廿五日庚申某

日崩女御從二位藤原尊子（亮） 歸暗戸（屋）女御故一條院女御也故瀨
白道魚女也

要記女御從二位藤原尊子道魚公女母前典侍從三位藤原尊子

長德四年二月十一日為御運殿別當入内年十五 同五年月

日叙從五位上 長保二年八月二十日為女御 同三年月叙從

四位下 六年正月十日從四位上 寬弘二年正月十日叙從三位

十二日叙正三位 ○按十二日以下
七字衍文 七年正月三十日叙從二位 ○按三十日權記為
二十日互後

後通參議通任朝臣 治安二年 月日薨

栄花（つね）の巻 一條院（の）女御更（の）衣（の）御（の）あ（の）さ（の）使（の）も（の）

（の）ま（の）ま（の）ゆ（の）ふ（の）群（の）又（の）く（の）く（の）へ（の）や（の）の（の）女（の）御（の）と（の）は（の）え（の）ハ（の）母（の）の（の）藤（の）

之位（の）いる（の）孫（の）宣（の）耀（の）及（の）の（の）ゆ（の）ら（の）ゆ（の）ら（の）乃（の）修（の）理（の）の（の）く（の）ま（の）を（の）あ（の）も（の）せ（の）ゆ（の）

え（の）ら（の）あ（の）

暗戶屋女御尊子事一條院女御栗田白贈太政大臣一女母

從三位藤原繁子 長德四年二月十一日入内年十。按榮

長德二年 長保二年八月廿日為女御 同三年正月叙從四

位下 寬弘元年六月叙從四位上 同二年正月叙從三位

後配參議通任卿 治安二年十二月廿五日卒年三十九

定子女妹

□ 爾云林陳發... 皇太后宮藤原朝臣妍子

三條院天皇中宮 後一條院天皇 皇太后宮

皇太后宮藤原朝臣妍子

紀畧寬弘元年十一月廿七日丁丑以正四位下藤原妍子為尚

侍左大臣第二御息女首書云御字可疑 十二月廿七日丙午尚侍

從三位藤原妍子矣多朝平門下令申叙從三位之慶賀去

七日叙之 同七年二月廿日庚子尚侍藤原朝臣妍子

初入東宮按榮花考六年十二月恐謬 同八年八月廿三日甲子今日

右大臣右大臣道方下女御二人宣旨一人尚侍從二位藤

原妍子左大臣二女一人無位藤原城子故大幼言濟時

卿女 長和元年正月三日辛未女御藤原妍子蒙可

二月十四日壬子宣命尊皇太后孝皇太后中宮孝皇太后女御正二位藤原朝臣

寛仁二年十月十六日乙巳宣命以皇后

皇太后 万寿四年九月十四日辛亥臨時

今日皇太后藤原妍子依病落飭即崩三年

丑奉葬皇太后於大峯寺前野了依遺

哀國忌山陵

妍子御事三條院后陽明門院母儀法成寺

三后源朝臣倫子 寛弘元年十一月廿七日

七年二月廿日始東宮 同八年八月廿三日為

元年二月十四日壬子為中宮 寛仁二年十

后宮 萬壽四年九月十四日依病落飾 同

六日葬于大峯寺前野

Handwritten text in vertical columns, likely a transcription of the printed text on the right page, including dates and names.

按史徵箋注云按今昔物語一條西洞院大峯寺云寺今亡巷名大峯
過子西南隅有古大石塔是蓋妍子墓以在大峯街俗曰修驗
僧墓

○按大峯寺在攝津今其地有二條西洞院而日本紀卷及本寺
云大峯寺于二條新基石之基曰拾芥抄云土中門以上為北邊又侍
中殿安云一條大峯寺北邊 又吉記云治承四年四月七日己丑中宮向
一條末川合社以中 然則一條西洞院大峯寺一所在此地當時
洛中也而為墓此地考可疑

儲の合の仁徳天皇の國圖の十幾箇の御孫
 何れもその御孫の御孫の御孫の御孫の御孫
 又四箇の十幾箇の御孫の御孫の御孫の御孫
 一、東面の三箇の御孫の御孫の御孫の御孫
 二、西面の三箇の御孫の御孫の御孫の御孫
 三、南面の三箇の御孫の御孫の御孫の御孫
 四、北面の三箇の御孫の御孫の御孫の御孫
 日本天皇の御孫長なる御孫の御孫の御孫の御孫
 御孫の御孫

三平の御孫一、東面の三箇の御孫の御孫の御孫の御孫

三條院天皇皇后

小一條院母儀

皇后宮藤原朝臣城子

紀畧正曆二年十一月某日大納言藤原濟時卿女城子入

東宮

○按本言日嗣采花考
十二月一日結後之

寛弘八年八月廿三日甲子今日

右大臣右大辨道方下女御二人宣旨一人無位藤原城子

故木幼言濟時中女。長和元年四月廿七日甲子立女御後

四位下

○按要記云寛弘九年正月
二十七日叙後五位下

藤原朝臣城子為皇后號中宮

職故濟時卿女此夕中宮入飛香舍

○按采花考廿
八日疑誤

寛仁

三年三月廿五日壬午皇后宮落飭為尼戒師僧山濟

信乳母年來宮仕女多以出家。万壽二年三月廿五日

○按采花大鏡云和宣親
般等要記松堀河女
御

○按要記云
一女

Handwritten text at the top of the right page, likely bleed-through from the reverse side.

Main handwritten text on the right page, written vertically in columns. Includes some ink blots.

Small handwritten text at the bottom of the right page.

Handwritten text on the left side of the right page, adjacent to the main text.

小右記万寿二年九月廿四日癸卯今日故皇后宮改葬云々永信
朝臣大藏通任所令勘而此日大不吉由人々云々仍以永
信被問文高伯裕申云尤可被忌日者仍停止者件日吉
平勘文云々凶事改定世之所忌也以上可考驗

Handwritten text on the left page, continuing the narrative or providing commentary.

陽
明
十
年
三
月
廿
三
日
田

六
普
萬
大
筆
書
引

喇
六
里

淑景舍女御 ○按即位は孝安卒故無女御言上曰
唯世孫之耳

紀畧長徳元年正月十九日丙寅今夜潮白第ニ女參東宮

長保四年八月三日丙寅今夜東宮女御藤子□子平

大鏡道隆の
傳あ乃乃かかハ之條院のトク言とPトをり淑景

舍道隆とくそまやうせ給しちとあうせ給りぬ

ちやと廿二之ちもろくうせ給りぬ

山
經
引

開成十年三月廿三日

六善画大筆書

後一條院天皇皇后宮

皇后宮藤子威子

裏書中宮

威子御事

後一條院后二條院后

法成寺入道撰

皇記改訂女母准三后源倫子

長和元年八月廿一日任高

三侍同十一月廿九日叙後三位

同三年九月十六日

九叙後三位

寛仁二年三月七日入内

九年十月十日

皇記

同四月廿八日為女御

同十月

畧記長元九年丙子九月廿日中宮藤原威子

瘡患也前太政大臣道長三女母左大臣源雅信女從三位倫子也

世謂之大中宮

蒙花

女房の巻

中宮

乃ゆゑに

よろしき女房をもて

開成十年三月廿三日

六書圖大筆書

後一條院天皇皇后宮

皇后宮藤子威子

裏書中宮威子 御事 後一條院后二條院后 法成寺入道撰

源倫子長和元年八月廿一日任高

同十一月廿九日叙後三位 同二年九月十六日

九叙後二位 寛仁二年三月七日入内九年十月 按紀畧云

同四月廿八日為女御 同十月

十六日為中宮 元從 按要記云為皇后 百味抄 長元九年九月四日

同廿七日明辨按要記畧記 長元九年三月十八日 同

十九日奉葬園城寺北地按要記畧記 長元九年三月十八日 同

蒙花女房の巻 中宮威子 乃ゆをい ききり けきり 日比

よろし せほめを又いりま 女房をいもてききりききり

中宮藤子威子
長元九年九月四日
叙為中宮

不可秘心不可悅飲

權記治曆五年二月十七日甲寅雨降依可有院跡未時許參

內裏中右府台大外記仰云停大皇太后宮可申陽明門院停

進屬等可為判官代主也代但年官年當如元次呂辨正家

仰云停大皇太后宮可申陽明門院令停內膳供事自

餘事如例之卿等起座參入彼院於下官不參仍不見彼

院之作法 彼院即歷能長 卿二條院

要記皇后禎子內親王三條天皇第之女且皇太后藤妍子

長曆元年二月三日為皇太后 三月一日改中宮職為皇后宮

藏年二十五春宮時所配也寬德三年七月二十一日為尼

畧記寬治元年正月十二日曾成子陽明門女院禎子山明年八十五

三條天皇御女後建在院后後三條天皇之母儀矣赤龜

瘡一疥害也

中右記寬治八年正月十六日戊子天晴今夜子刻時許陽明門

院山朋于鴨院是依龜瘡也 御年八十二禪定仙院者諱禎子三條院第

三女母皇太后藤妍子入道大相國之女也 長和二年七月六

日誕生 同十月為內親王 同四年准后 治安二年一品

萬壽四年入東宮十五 長元十年為中宮 同三月皇后

寬德二年洛筋 永承七年為皇太后 治曆四年為大

后。五年於陽明門院 石后位廿三年院跡後廿六年

為當時太上皇祖母中宮為子 廿三日乙未今夕陽

明門院御入推云々 二月五日丁未今夜陽明門院有

御葬送事山作一所鳥部野也 中女院御葬禮前大役散位

在子仲御骨置仁和寺山陵後朱在院御追信家追朝

后繁奉之咒願權律師慶堵左衛門督獻牛依為院
司也御車上物云々今夜依敷下御衰日不被奏遺令

57

勘仲記正應五年九月九日條云寬治八年正月十六日丑刻陽明門

院御事春秋八十二 五日御葬占鳥部野為御墓所。十日新陽明

門院別當前加賀守藤原家通朝臣參右衛門陣令大外記清

原定俊傳中云去月十六日陽明門院崩給遺令云素服舉

哀國忌山陵可從停止者

自贈是以卷甲瘞丈體瀕而歸之而天命公至斯
隙遂近東夷傾縣縣思尊皇感而瑞昔外罪荒縣
茲大軒宮文並吉辭為奏奉天皇日且受命天

其山... 中宮藤原源子... 長曆

畧記長元十年正月七日甲辰朝白左大臣藤原朝臣賴通取式部

卿敦康親王女源子女王考養子令參内中中務卿具

平親王女也 三月一日女御藤原源子立中宮 長曆

三年八月十九日中宮源子誕生女王廿八日中宮崩也

鏡世繼中宮云々乃たくら後に出させらるる

十三日左の... 乃たくら後に出させらるる

死の... 三月一日女御子... せ

うちつき又の... やりにまゝり出させ

波守熱まきまの... 長曆三年八月十九日

行女まう... 廿八日... せ

要記中宮藤原子左大臣女安一品式部卿敦康親王女中

務卿具平親王女萬壽〇按元年正月七日甲辰

入内〇按同二十九日為女御叙正四位下 三月一日為后

年二十一 長曆三年八月廿八日〇按年二十四

前令關山〇按前令關山〇按前令關山〇按

八十八其八〇按八十八其八〇按八十八其八〇按

五十三箇符〇按五十三箇符〇按五十三箇符〇按

麻內〇按麻內〇按麻內〇按

感賢〇按感賢〇按感賢〇按

對行〇按對行〇按對行〇按

對西〇按對西〇按對西〇按

然其四〇按然其四〇按然其四〇按

然其四至〇按然其四至〇按然其四至〇按

贈皇太后宮藤原子嬉子

東吉〇按東吉〇按東吉〇按

四女〇按四女〇按四女〇按

三年三月四日叙從三位 治安元年二月一日入太子宮 萬

壽一年八月五日卒 同十五日葬于延福園西 同

〇按要記為身
六女非也

〇按一年考三年誤
至七歲可以記

〇按要
記未
二十五
日未

十位
十一位
十二位
十三位
十四位
十五位
十六位
十七位
十八位
十九位
二十位
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十

要記中宮サ勝、嬪子左大臣女安一品式部卿敦康親王女母中

務卿具平親王女、萬壽寺中 元年正月七日甲辰

入内中 同二十九日為女御叙正四位下 三月一日為后

年三十一 長曆三年八月廿八日山崩年二十四

一十其八、蘇下具林、南王麻刻焉、今蘇山南壽善山、
五十三箇符、二、四、調、望、觀、審、山、古、獻、當、
蘇内、北、能、事、立、子、事、天、字、高、壹、箇、符、蘇、
蘇賢、眼、團、蘇、東、北、蘇、十八、古、今、大、率、到、軍、官、
蘇、蘇、山、二、抄、普、文、具、工、山、噴、蘇、八、並、巧、園、
蘇、西、別、園、蘇、北、別、崇、蘇、寺、四、至、
蘇、其、四、至、蘇、蘇、其、四、至、文、東、別、蘇、蘇、南、別、大、園、

按要記為身
古女非也

按一年為二年誤左
經此左可以說
古三年

贈皇太后宮藤原嬉子

表書贈皇太后宮嬉子御事 後朱雀院妃
法成寺入道攝政

四女御從一位深朝臣倫子 寬仁二年十一月十五日任尚侍中同

三年三月四日叙從三位 治安元年二月一日入太子宮 萬

壽一年八月五日卒 年十 同十五日葬延船園西 同

廿九日贈正一位 寬德二年八月十一日贈皇太后宮

左經記万壽二年八月五日甲寅陰時、降雨及申刻尚侍殿
忽率去之、天下道俗男女舉首歎息之、及夜終宵甚雨
卒去之由一所疑万端也或云靈氣一所為之、或云產後依不
加勞着血上所為之、或云脚產月依加持邪氣成各一所為
云、日者令世有脚產
氣仍一奉加持也 袍瘡給未平損給之間 六月乙卯晴早

按要
記初依
二十五
日未
知孰

年二十四
今對山前身善山山
高壹箇持味
今大軍到軍官六
山崎豐齋八並五箇
無幹三南朝大関下

法成寺入道堪政
一月十五日任高侍
月一日入太子宮
萬
花井運船同西
同

年雨及申刻尚侍殿
及夜終宵甚雨
或云産後依不
持邪氣成各一所為
之間 六月乙卯晴早

要
記
二十五
日未
知

紀略一萬壽二年八月二日壬子東宮妃尚侍藤系嬉子生男後生
於太皇太后宮有此事 九日甲寅尚侍從二位藤系嬉子生男後生
十五日甲子尚侍嬉子葬送船舟同西教區内方類生春宮大夫中宮能後權大
夫被送之 廿九日戊寅奏前尚侍甚由之宣命贈正一位有賜物
絹百疋調布二百端穀倉院送之 十一月十二日庚寅今日入道道長
大相國建之儀者之昧堂為故尚侍嬉子謚善也

地籍別記
中
丁
二

さそやうくちにおりまゝかの家のけいはい
いさうのり人よとせ給へる給へる給へる給へる
せ給へる給へる給へる給へる給へる給へる給へる
その神のまはるまはるまはるまはるまはるまはる
けぬまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
はいつてう給へるまはるまはるまはるまはるまはる
於播磨守やまはるまはるまはるまはるまはるまはる
の

女御藤原生子

永保四年皇代記女御後四位下藤原生子内大臣教通一女

御大納言藤原任女 長曆三年十二月廿一日丁未入内

寛徳元年正月十日後三位 永承元年十月八

日正二位 主上自二條第 同五年三月廿六日後一位

喜元年三月日洛飭為尼 治曆四年八月廿一日葬五

十五

采花の老 内左衛門の御子 采花の老 采花の老
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
うまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる

按要記同上月誤考記以入内
係三月可以地

按今鏡為二女
尊卑分脈為三
女並誤也

三十五
紅丸
...

按書記
三五日

つゆさみく 及法公をつくろせ 治へり

及いねわあありてさゆり

...

...

...

...

...

...

女御サ勝系延子

畠山長久三年三月廿六日巳巳春宮大夫サ勝系朝臣頼宗御

是女也子始入木内

要記女御從四位上サ勝延子春宮大夫頼宗御女母麻太卒権

帥伊周女 長久三年三月三十日木内 同五年正月十日

從中任上 永承三年正月八日從三位 同五年正月五日

後上座

○按案花今鏡云鹿景御女

中右記嘉保二年六月十日今朝初間高倉女御去夜半依

雨直俄其由年八十云々女御諱延子故入道右大臣

川女也母帥内方后女也 長久三年三月廿六日入内 五年

正月十日從四位上 注正子内親王 後為斎院 永承三年正月八日從三位

五年正月十九日從二位 右大臣 康平三年四月廿日父

...

右方臣奏請割分封戶五百烟讓此女御有故 延久五年
五月十二日依病為尼五十四 去夜其死也

正年對一割新

對一割新天皇御對一或或八姓八籍號十八年曾良

即或十年正月十一日

主封六善為大觀前引

後冷泉院天皇皇后宮

二條院章子內親王

畧記長曆九年丁丑十二月十三日章子內親王入東宮 永義

元年丙戌七月十日戊子章子內親王立中宮 後一條天皇

長女母中宮藤子威子也 ○按之補任云權大御言正二位藤
長家民部七月十四日兼中宮大天冊

余日要記皇年傳記少傳女院記
共同本世是知十日召仰之日

小侍二條院章子 後冷泉后 後一條院第一皇女母法成寺院白

第三女 ○按要記云四女 藤壺中宮藤威子 萬壽四二十一

為內親王 年二 ○按紀畧云萬壽三年十二月九日辛巳未時中宮
御產才一皇女女院記為十月九日誕生 長元

三十一廿一品准三宮 五 ○按女院記云
本封加十戶 長曆元二十三入太

子宮 十二 ○按女院記云十三日有者蒙幸同十九日入
太子宮 寬德二正十六

為女御 受禪日
年二十 永義元皇七十為中宮 廿一 治曆四四十

古為皇太后 四十三今年四月十九後冷泉有御事 同五三廿三為尼 廿四 延久

元七三為大皇太后 承保元六十六壬午院 四十按女院記云十七日

長治二九十七御事 年八十按女院記云十四日御事百練抄考

百練 長治二年九月十六日二條院 章子八十後按中右記大治二年八月十五日

條云故二條院長治二年山物喜提樹院

開成十年四月四日

主到六善大筆削引

中宮藤原寬子

畧記 永承五年十二月廿一日癸卯 關白左大臣藤原朝臣賴通

息女寬子初入內裏 母中務卿具平親王女贈從二位源

朝臣祇子也 母年三月十三日早甲子關白左大臣息女

女御從中位下藤原寬子冊以為皇后 年十五歲

中右記 大治二年八月十四日辛未巳時許 攝政殿給御消息云

此曉太后山崩 給了雖無服假 今日參院如何相量可示

合者進返事云 准御假殿一家之中為宗人之却事也

知信朝臣記 大治二年八月十四日辛未 寓刻大皇太后宮於宇治祝

及山崩給九十二

院后 永承五年十二月廿二日入內 十五長元九年生口按中右畧

同廿七日叙從四位下即為女御 同六年二月十三

百練抄大治二年八月十四日大皇太后寬子崩于宇治別業 九十二年治政抄女院冷泉院后

古為皇太后 四十三今年四月十九後冷泉有御事 同五三廿三為尼 廿四 延久

元七三為大皇太后 承保元六十六壬午院 四十按女院記云十七日

長治二九十七御事 年八十按女院記云十四日御事百練抄考

百練 長治二年九月十六日二條院 章子八十後按中右記大治二年八月十五日

條云故二條院長治二年山物喜提樹院

開成十年四月四日

主五十六善大筆書引

中宮藤原寬子

畧記永承五年十二月廿一日癸卯關白左大臣藤原朝臣賴通

息女寬子初入內裏母中務卿具平親王女贈從二位源

朝臣祇子也 年三月十三日早甲午關白左大臣息女

中御從中位下藤原寬子冊以為皇后年十六歲

中右記大治二年八月十四日辛未巳時許攝政殿給御消息云

此曉太后崩給了雖無服假今日參院如何相量可示

給者進返事云雖御服假一家之中將宗人之御事也

今暫御出仕不可候也 太后諱寬子 宇治敏子後贈從

院后 永承五年十二月廿二日入內 十五長元九年生口按中右畧

同本書 同廿七日叙從四位下即為女御 同六年二月十三

百練抄大治三年八月十四日大皇太后寬子崩下宇治別業九十字治敏子後冷泉院后

才二女一子訓

按十書中要記稱十七日
是也公神位云權
中御言正位源經長
言內之皇后言天文
四月十七日為中宮文
又可以說

大聖

日為皇后十六 治曆四年四月十六日為中宮 同十二月四日
為尼 廿三 去四月十九日天皇皇女 延久元年七月三日為皇
太后 義保元年六月廿日為大皇太后其後坐宇治別業修
種之佛事 大治二年八月十四日崩給年九十二在右位七
十七年古今未有如此例 十五日壬申未時許廣親為大
殿使入來云太后之事日者如待日遂以入滅給悲歎之
甚不可言盡於今者彼御事何様可沙汰哉先可有薨
奏遺令哉予申云近代女院御祈每日濟之被避旁御
衰日測定又無日次致就中故二條院長治二年山崩菩提樹院
時無遺令并其奏依彼例不可候致近代作法於事難
者甚多御用心可候也又三今日中早夕可遂之由有遺
言如何申云宇治殿宇治大納言三今日內早可遂事由雖
有御遺言依無日次皆被延也三今日中無日次者可被

延也万事皆以僧可為優人 事 則以此便遣問日時
歸來云申云御入棺十六日御葬送廿一日山作 南方
也明日可近者 十六日今夕太后御入棺云 廿一日
戊寅今夕太后御葬送云 御墓二所一坂東邊役人皆
僧後朝永明阿闍梨縣心御骨向本幡念佛僧十人沙
讀經衆六人護摩二人云

皇后宮藤原歎子

皇手代記皇后藤原歎子左大臣三女母攝太師言公任女 永承

三年十月十四日入内 三年七月十日老女

畧記 永承六年六月廿四日女所歎子有之宮 賜年官年高封

三十九戶 云七月十日准之宮云 治曆四年四月十六日丁

巳三女所藤原朝臣歎子為皇后宮但無之宮命以宣旨

立之 傳口教通朝臣之親母上即太師言公任攝太師也

要記 皇后藤原歎子左大臣教通第三女 永承二年十月十

日乙卯入内 同三年七月十日為女所 同六年七月廿日

准后 治曆四年四月十七日為皇后 准之宮後皇后奉

代例也 永保元年六月二十三日為皇太后 八月廿

按畧記三無宣命以宣旨立之

按皇手代記云母權大御言公任女

按畧記云六月廿四日准之宮賜年官年高封三十九戶云七月十日准之宮



